

短期大学生を対象にした造形活動における「触覚」についての試み — 領域「表現」「様々な素材」に着目して —

東本 康栄

大阪信愛学院短期大学

Human and Environment Vol. 13 (2020)

How Touching Experiences Enrich Student's Creative Activity,
a Case of Japanese Woman's College Students.

—An Interpretation of “Various Materials” from the Area “Expression”, Pre-School Curriculum —

Yasue Higashimoto

Osaka Shin-AI College

領域「表現」の“様々な素材”という文言に着目すると、造形表現においては素材に触れる感覚—「触覚」が重要だと捉えた。そこで本研究では保育士・保育教諭・幼稚園教諭・小学校教諭をそれぞれ目指している学生を対象に2回の触覚体験を試みると共に、“様々な素材”の意図を考えていくことにした。触覚体験の結果、学生たちは触覚がもたらす力や大切さを実感し、日常生活や造形表現で重要な働きをしていると気づくと同時に保育者・教師としての視点も学び得られたことが分かった。素材の触れ心地などを実感する経験が造形表現の源だといえ、保育者・教師は乳幼児期の子どもたちにあらゆる外の世界を知り視野を広げる豊かな経験ができるように、“様々な素材”を用いて橋渡しをしていくことが大切なのである。また、子どもの思いの実現に沿えるような支援や環境作りなどの在り方も“様々な素材”には込められているのだと捉えた。

キーワード：造形活動・触覚・領域「表現」・様々な素材

1. はじめに

平成30年4月1日より保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領の3法令が同一に改訂されたものが施行された。その内容は、今日における全施設での幼児教育内容の一層の整合性を図ることに力点が置かれたものだと

捉えられる。そのような内容の中、領域「表現」においても“様々な素材”は3法令のいずれにも表記されている文言である。また、今改訂で新たに示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の「豊かな感性と表現」の中に記載されている文言でもある。この「様々な素材」に着目し、表現活動、なかでも造形表現においてこの文言が意図しているところを探ってみたいと考えた。

「様々な素材」について保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領の各解説では、満1歳以上3歳未満の子どもに関して「様々な状態の様々な素材に自らの体で直接触れ、

*大阪信愛学院短期大学子ども教育学科
〒536-8585 大阪市城東区古市 2-7-30
E-mail: higashimoto@osaka-shinai.ac.jp

受付：2020年1月7日 受理：2020年2月28日

©2020 大阪信愛学院短期大学

そのものの感触などを十分に味わい、楽しむ経験を通して、子どもは自らの感覚や感性を豊かにしていく」[1][2]としている。また、満3歳以上の子どもに関しては保育士・保育教諭等、教師が「様々な素材を用意したり、多様な表現の仕方に触れるように配慮したりして、(中略)十分に楽しみながら表現し親しむことで、他の素材や表現の仕方に新たな刺激を受けて、表現がより広がったりするようなことが考えられる」[3][4][5]としている。

そして造形活動においての素材について、岩崎由紀夫は「豊かな素材体験を十分に蓄積した子どもたちは材料や行為から生まれた形に、自分が内在しているイメージを結び付ける意味づけ活動が始まる。そのためには、触覚を楽しみながらいろいろな素材に触れ、手や体の機能を充実させる必要がある。なぜなら造形活動の核は何といっても手や体の働きであるからだ。そして、行為も意味づけも素材の孕む魅力があってこそ価値ある造形活動の展開が期待できる。」[6]としている。さらに、椎橋げんきは「幼児期の子どもたちは、ものと呼応しながら興味関心やその思いを形にし、その形が次のイメージにつながる。そのためには、応答性のあるもの〈素材〉とたくさん出会うことと、応答性のある保育者や大人とたくさん出会うことが大切だ。」[7]とも述べている。したがって“様々な素材”について考えていくためには素材に触れる感覚、すなわち「触覚」というものが重要になってくることが分かる。

触覚について槇英子は「あらゆる感覚の基盤になっていると考えられるとし、視覚や聴覚とは異なり手や指を自ら動かすことによってはじめて生み出される感覚で、子どもたちは大人より多くのことを触覚から得ており、「触れー触れられる」という相互性が身体感覚を豊かに育む」[8]としている。しかしながら、小笠原文は「視覚優位の現代社会に於いて視覚以外の感覚が忘れられ、特に「触覚」に関する感度の低下が著しい」[9]と指摘している。

以上のことから、触覚は幼児期の子どもたちに豊かな感覚を育むために不可欠なものであり、素材に触れる感覚を通して創造しイメージを育む造形表現活動においても重要なものであると捉えることができる。

そこで本研究では、A短期大学子ども教育学科1

回生を対象に図画工作の授業の中で触覚体験を試み、その体験を通して学生たちが何を学び取ったのかを振り返りやアンケート結果から考察すると共に、領域「表現」において“様々な素材”が意図しているところを考えていきたい。対象とした学生は、保育士・保育教諭・幼稚園教諭・小学校教諭をそれぞれ目指している。そのような学生たちが造形素材などを通して触覚を体感することは、これから幼児期の子どもや小学生の造形表現活動を支援・共感していく立場、すなわち先述した応答性のある保育者や教師としての視点を培うためにも有意義であると考えた。

2. 研究方法

2.1. 研究対象の概要

対象者：A短期大学（女子校）子ども教育学科1回生

期間：令和元年11月（授業1回分+15分）

2.2. 授業内容

授業①（15分）対象者数：28名

- ・ 4つの箱の中に手を入れて箱の中に何があるのか・何個あるかを感じ取る。
- ・ 振り返りシートへの記入

授業②（90分）対象者数：33名

- ・ アイマスクをつけて3種類の粘土の感触をそれぞれ感じ取りながら造形物を作る。
- ・ 振り返りシート・アンケートへの記入

3. 授業実践と結果

3.1. 授業①実践と結果

授業実践②を行う前週に、本研究のイントロダクションとして15分間程触覚体験を行った(図1)。4つの箱それぞれの中に、大きさの異なる洗濯バサミ(5つ)・大きさの異なる松ぼっくり(6つ)・卵の空パック(1つ)・紙粘土を雑巾のようにねじって乾燥させたもの(1つ)という、これまでの生活の中で触れたことがあるだろうと推測した自然・人工素材を準備した。紙粘土をねじって乾燥させたものに関しては、前期の授業の中で使用した同じ紙粘土で自身が作ったものである。



図 1：授業①の様子

これまでに触れて知っているものを視覚がない状態でも判別できるのか、触覚だけを頼りに数を正しく数えられるのかを触察することをねらいとし、学生にはこれまでに触れたことがある素材だとは告げず、

生き物や刃物など危険なものは入っていないことだけは伝えた。どの箱からでもよいので各々箱の中に手を入れ、視覚に頼らず触れた時の感触を大切にしながら箱の中のものや個数を感じ取るようにと助言した。

表 1 に示したように、視覚が使えない状況で「モ

ノを触る」ことに78.6%の学生が不安であったことが分かり、不安を持ちながら体験した学生が多かった様子が窺えた。しかし感触を味わうことや手で触れることでモノが分かるのかという楽しみや興味を示す学生も21.4%と少数ながらいた。

触覚体験の結果、洗濯バサミ・松ぼっくり・卵の空パックについては素材の感触や触った時の音からすべての学生が正しく回答できが、紙粘土についてはすべての学生が素材と形を感じ取れなかった。紙粘土だということが分かってねじれている形までを感じ取れなかったり、紙粘土ではなく新聞紙をねじったものだと感じ取ったり、ねじったモノだとは分かってそれが紙粘土だとは気づけなかった学生が32.1%（9名）であった。また触れてモノの個数を数えるようにしたが答えの数にばらつきがあり、

表 1 授業①についてのアンケート結果（回答数：28名）

箱の中に手を入れる前に不安が

	人数 (%)	理由 (人数)
あった	22 (78.6)	何が入っているのかが分からない、見えない (18) 気持ち悪い感触だったら嫌だという思い (2) その他・無回答 (2)
なかった	6 (21.4)	感触を味わうことへの楽しみ・興味 (5) 危ないものが入っていないと伝えられたから (1)

表 2 授業①の振り返り内容（複数回答）

	理由 (人数)
触覚の経験値 (27)	日常的に見て触っているものは触るだけでも分かる・体が覚えている (8)
	自分がよく知っているものでないと箱の中身が何かに気づくのが難しい (4)
	触る経験から覚えていることが多い (4)
	触っている内にモノが何かが頭で一致する瞬間が楽しかった (3)
	触る経験の大切さが分かった (3)
	触って知っていくことを小さい頃に行うことが大切だと感じた (2)
	触覚が生活の中で大きく関わっている (2)
手の感覚だけですぐに何かが分からなかった。 (1)	
視覚と触覚の 関係 (6)	目で見て実際に触れることで初めて本当にそのモノが何かが分かるのだと感じた (2)
	視覚が使えなくなると手の感覚が鋭くなった (1)
	視覚に頼りがちな日常生活だと気づいた (1)
	触覚でモノの形が分かって色までは分からない (1)
触ることで得られた 事柄 (2)	触ることで柔らかい・硬い・痛いなどを感じ、気持ちいいなどの感情が生まれる (1)
	硬いと感じる中にも素材の違いから微妙な違いを感じ取ることができた (1)
その他 (1)	卵の空パックは触るだけでなく、触った時の音からも気づけた (1)

正誤関係なく視覚がない状態で触るだけで数を数えることが思っていたより難しかったという学生の声があがった。

表2で示した本時での振り返り内容からは、視覚がなくても日常や過去に触れたことがあるモノは体や頭が記憶していることや何に触れているのかということや自分の経験を基に探った様子など、これまでの生活経験に関わる事柄が27件と一番多かった。その他少数意見ではあったが、視覚と触覚の関係性を実感した様子や感触から「気持ちいいなどの感情が生まれる」ということに気づけた学生もいた。

3.2. 授業②実践と結果

今回の授業では視覚を遮るために学生たちにアイマスクを着けさせ、3種類の粘土に触らせて視覚を用いずに指先だけの感覚で簡単な立体物(立つもの)を作ることを試みた



図2 授業②の様子

(図2)。本研究の試みに粘土を使用した理由は、槇英子が「子どもたちが好むドロドロやふわふわのもの感触や粘土あそびは“心を開放する”というが、大人にはその意味が実感できない」[10]と指摘しているからだ。子どもの触覚的活動の意味を体感することや粘土にも様々な種類があり、それらの素材の特徴や感触・量感の違いを手や指先だけで感じ取ることをねらいとした。

学生には粘土だとは告げずに造形素材だということだけを告げ、紙粘土→油粘土→テラコッタ粘土を20分程の間隔をあけて順に配った。3種類の粘土を配布する順番について、手が汚れてしまい洗いに行くということ avoided かった。なぜなら、手を洗うとなればアイマスクを外さなくてはならず、どうしても自分や他人の制作物に目が行ってしまいつくることだけに興味がいきがちになり感触や量

感を味わうことに集中できないのではと考えたからである。また今回使用した粘土の内、紙粘土や油粘土はこれまでに触った経験があるだろうと思い、3つ目の粘土はあまり触れたことがない粘土素材がよいと考え、土粘土の一種であるテラコッタ粘土を使用した。

学生たちは粘土が配られるたびに感触を確かめようとゆっくりと触り、時には匂いを嗅ぎ、粘土を伸ばしたり、ちぎったり、丸めたりを繰り返していた。5～10分程感触を確かめた後、次に各粘土の特徴や量感の違いを感じるために、何か立ち上がる立体物を指先だけの感覚を使って作るようにさせた。最初の粘土を配った時には少々ざわついた印象があったが、次第に私語がなくなり静かな状況になった。視覚が遮られた分、手からの感覚を研ぎ澄ませようとした表れだと感じた。すべての粘土に触った後、3種類の粘土について種明かしをしたところ、学生たちは紙粘土・油粘土については知っていたが、テラコッタ粘土に関してはほとんどの学生が初めて触った素材だった。

表3に示した通り、学生全員が3種類の粘土の違いを感じられた。表4で示した粘土の違いからは、これまでに触れたことがあるだろう紙粘土や油粘土については感触・特色のみの意見が多く、そこから感じた感覚や感情に対しての事柄があまり出なかった。しかし先述した通り、ほとんどの学生が初めて触れたテラコッタ粘土に関しては粘土に対しての快・不快の反応や手についた粘土の感覚、「ジャリジャリ」という感触を砂糖のようで「お菓子作りと同じような感覚」などといったこれまでに経験した記憶と重ね合わせていた学生もおり、感覚・感情に対するものは先の2つの粘土とは異なり多くの意見が出された。

前回の授業実践では視覚を使わないことに不安を持つ学生が多かったが、今回の素材が造形素材だと告げたからなのか、不安を感じずに楽しく活動でき

表3 授業②についてのアンケート結果(1)(回答数:33名)
3つの粘土の感触の違いを感じ取ることが

	人数(%)	理由(人数)
できた	33(100)	粘土の違いを感じ取れた(33)
できなかった	0(0)	

表4 授業②で感じた粘土の違い（複数回答）

	紙粘土(人数)	油粘土(人数)	テラコッタ粘土(人数)
感触	<ul style="list-style-type: none"> ・やわらかい(13) ・軽い(7) ・サラサラ(3) ・ふわふわ(3) ・もちもち(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・硬い(10) ・重い(10) ・冷たい(5) ・さらさら(2) ・ベタベタ(1) ・ぬるぬる(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ザラザラ(11) ・冷たい(7) ・ねっとり(5) ・重い(3) ・硬い(3) ・ジャリジャリ(2) ・濡れているような感じ(1) ・柔らかい(1)
特色	<ul style="list-style-type: none"> ・伸びがよい(8) ・形の変化がしやすい(4) ・立たせることが難しい(2) ・やや粘りがある(2) ・ちぎりやすい(2) ・握りやすい(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか伸びない(6) ・立体物が作りやすい(5) ・手になじむまでに時間がかかった(3) ・こねているうちに柔らかくなる(2) ・ちぎりにくい(2) ・接着しやすい(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり伸びない(3) ・手になじむのが早い(2) ・立体物がつくりやすい(1) ・ぶつっと切れやすい(1) ・立体物の安定感が良い(1) ・粘り気がある(1) ・ちぎりにくい(1) ・触っているうちに柔らかくなる(1)
感覚や感情など	<ul style="list-style-type: none"> ・ずっと握っていたい(1) ・触っていると心地よい(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・油臭いと感じた(5) ・油粘土だと感じた時に安心感が芽生えた(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・触り心地が悪い(6) ・土や砂のような感じ(3) ・ジャリジャリした感じが砂糖のような感じ(2) ・手についたものが直に乾く感覚(2) ・触り心地が良い(2) ・初めての感触で怖かった(2) ・泥団子のような冷たい感じ(1) ・手が汚れていく感覚が分かる(1)

表5 授業②についてのアンケート結果（2）（回答数：33名）

視覚を遮り指先の感覚だけでモノを作ることが

	人数(%)	理由(人数)
楽しかった	33(100)	(できあがり)を想像・イメージしながらつくること(15) 手や指先だけの感覚で(集中して)つくること(8) 視覚を遮ってつくるのが初めてだったこと(5) 触り心地の違いを体感できたこと(3) 子どもに戻った気持ちになれたこと(1) 「こうあるべき」という概念が取り払えたこと(1) その他(2)
楽しくなかった	0(0)	

た様子が表5に示した通り窺える。視覚を遮ること
で生じる不便さよりも、想像・イメージしながらつ

くること（15名・45.5%）や指先だけの感覚でつく
ること（8名・24.2%）を楽しんだ様子が窺える。ま

表 6 触覚体験後のアンケート結果 (回答数 : 33名)

① 生活をしていく中で触覚は

	人数 (%)	理由 (人数)
必要	33 (100)	(危険から身を守るなど) 触って認識する重要性 (21) (人の心を動かし) 感覚や感情を生み出す(10) 人との関わり(触れ合い)の中でも必要(1) 無回答(1)
必要ではない	0 (0)	

② 造形表現の中で触覚は

	人数 (%)	理由 (人数)
必要	33 (100)	触ること(指先の感覚)から想像・イメージ・考えが広がる(11) 触り心地や触ってつくる楽しさを体験するため(10) 触って理解する・学ぶことがある(6) 触覚を刺激するため(2) その他(2) 無回答(2)
必要ではない	0 (0)	

表 7 授業後の振り返り内容 (複数回答)

	理由 (人数)
保育者・教師としての視点 (15)	視覚を遮ることで子どもが初めてモノに触れる時に感じる感動や不快、怖さという気持ちが分かった。(9)
	小さい頃から様々なモノに触れて自分の知っているモノを増やしていく経験が必要なのだと感じた。(4)
	子どもの感覚の発達を促せるような工夫した活動に取り組めるようになりたいと、この授業内容を通して感じた。(1)
	先生が触覚の大切さを分かっていないと、子どもたちにそれを教えていくことができないなと感じた。(1)
視覚と触覚の関係性 (12)	視覚を遮ることで日頃いかに視覚を頼りにしているのか(不自由さ)を感じた。(6)
	触覚の大切さが分かると同時に視覚の大切さも分かった。(3)
	視覚では測れないこと(重さ・伸縮性・温度など)を、触覚から知ることができると分かった。(3)
触覚がもたらす事柄 (4)	快・不快などの感情が生まれる。(2)
	想像力が広がる(1)
	触覚を通して実感したことは記憶や体に残る(1)
その他 (5)	日頃よく使う視覚を遮ることで、触覚だけでなくその他の感覚(嗅覚・聴覚)が研ぎ澄まされることを実感した。(2)
	触覚に限らず、感覚とは大切なものだ気づいた(2)
	様々な粘土に触ることで、様々なモノに触れることへの好奇心が湧いてきた。(1)

た、少数意見ではあるが制作活動においての「こ
うあるべき」という学生自身が持っていた概念の払

拭や「子どもに戻った気持ちになった」というよう
な心の解放を実感した学生もいた。

3.3. 授業実践後の結果

2回の授業実践を踏まえて、生活や造形表現での「触覚」の必要性を質問した内容をまとめると表6に示す結果となった。

生活の中で「触覚」が必要だと全員が回答した。理由として「触って認識する重要性」が63.6% (21名) と一番多く、「危険から身を守る」「見た目だけではわからないことが多い」「触覚がないと困ることが多いと思った」といった内容であった。次いで「感覚や感情を生み出す」が30.3% (10名) と触れることで生じる感覚や感情に関することであった。触って「熱い・冷たい・痛い」といった感覚は先述した認識する重要性と重なる部分があるが、それらの感覚を通して心が動かされ「快・不快」の感情や「安心感・心の安定」が生まれるといった内容であった。このように日常生活の中で当たり前のように溶け込んでいるモノの認識や感覚・感情の産出が、触覚の働きからきていることを再確認できたと思えられる。また、造形表現での「触覚」の必要性についても全員が必要だと回答した。素材に「触る」ことで「想像・イメージ・考えが広がる」との意見が33.3% (11名) で一番多く、続いて「触り心地や触ってつくる楽しさを体験するため」30.3% (10名) となった。これらの意見は今回の粘土での体験に基づいたところが大きく影響した意見だと考えられる。少数意見ではあったが、便利な生活を送る中で低下しつつある触覚を「造形活動を通して刺激するため」(6.1%・2名) との意見もあり、これからの造形表現活動で必要な1つの要素に気づいた学生もいた。

表7に示した授業後の振り返り内容では、保育者・教師としての視点に関する意見が計15件あり一番多かった。授業①後の振り返り内容(表6)での経験値のカテゴリーの意見と重なる部分があるが、今回はより具体的な意見が出たため、保育者・教師としての視点というカテゴリーでまとめた。その中で「子どもが初めてモノに触れる時に感じる感動や不快、怖さという気持ちが分かった」が9件と最も多く、保育者・教師として子どもの気持ちに共感できる体験をしたと推察できる。次いで「小さい頃から様々なモノに触れて自分の知っているモノを増やしていく経験が必要」が4件あり、様々なモノに触るといふ経験値の必要性を感じ取ったといえる。視覚と触覚の関係性のカテゴリーでは「日頃いかに視

覚を頼りにしているのか(不自由さ)を感じた」が6件と最も多く、視覚優位の現代社会を学生から垣間見られる意見であった。少数意見ではあるが「視覚を遮ることで、触覚だけでなくその他の感覚(嗅覚・聴覚)が研ぎ澄まされる」(2件)・「触覚に限らず、感覚とは大切なものだ気づいた」(2件)と今回の体験を通して五感の働きに関心を持つ学生もいたことが分かった。

4. 考察

4.1. 授業実践・結果からの考察

これまで触覚に関する体験について、事例として保育者・教師を目指す学生を対象にした2つの授業実践やアンケート結果、振り返りを取り上げた。これらから学生たちが、今回の体験を通して何に気づき学んだのかを考察していく。

学生たちのアンケート結果や振り返りから、気づきや学びを3つに分類することができる。①触覚の大切さ、②触覚がもたらす感覚や感情・想像力、③体験を通して芽生えた保育者・教師としての視点である。

今回の触覚体験を通して「触覚の大切さ」に気づけたことが大きな学びであったことが、アンケート結果や振り返りからも分かる。中丸雄二郎は、触覚の働きについて「とくに手でさわる触覚が、視覚と匹敵する総合的な知覚作用を持ちうるもの」[11]であるとしながらも、視覚と触覚の関係性において「私たちは実際には視覚と触覚との協働にあまりに慣れているので、その協働を協働として自覚することはきわめて厳しい」[12]と述べている。つまり、私たちは視覚と触覚の協働に慣れ過ぎていること、視覚優位の現代社会で生活する私たちは特に手で触ることが視覚に匹敵する知覚作用を持っていることに気づけていないということだ。

授業①で箱に手を入れることが不安だったと78.6% (22名) の学生が回答し、その理由の大半が「何が入っているのかが分からない、見えない」だったが、言い換えれば触覚が持つ力に気づいていないがために不安になったとも推測できる。けれども、2つの触覚体験から経験値から感触だけでモノが分かったことや指先だけの感覚で粘土の違いを感じ取れたのは、学生たちの視覚に匹敵する知覚作用が働

いたからだと捉えられる。そして今回の体験を通して「目で見て実際に触れることで、初めて本当にそのモノが何か分かるのだと感じた」「視覚では測れない重さや伸縮性・温度などは触覚から知ることだとよく分かった」「触覚の大切さが分かつと同時に視覚の大切さも分かった」という思いは、視覚と触覚の協働を実感できたからこそである。

そして触覚の大切さを知ると共に、生活や造形表現活動においてもこの触覚が必要だと感じたことが分かったが、造形的な表現活動を行う場合「みる」力が必要だと考えられがちだが、実は触覚も重要な働きをしている。粘土での触覚体験を通して、手で触ることだけでそれぞれの特徴を感じ取ることができたが、それだけでなく「手に付いた(テラコッタ)粘土が直ぐに乾く(パリパリとした)感覚があった」「手が汚れていくのが分かる」といような素材から自分が感じた感覚や、粘土の感触から心地よい・気持ち悪いといった「快・不快」の感情を呼び起こしている。触覚がなければ「熱い、冷たい、痛い、気持ち悪いなどの感覚や感情が生まれず」と学生も感じたように、触覚は自分が触って感じた事柄を通してそのモノに対しての感情を生み出すものでもある。モノを視覚だけで捉えると「熱そう・冷たそう・硬そう・柔らかそう・〇〇みたい」などといった見た目だけに留まってしまいがちだが、触覚はモノの実感を与え感情を呼び起こす1つのスイッチだといえ、感性を育む上でも重要なものである。

エリ・エス・ヴィゴツキーは「人間の過去経験が豊かであればあるほど、その人の想像に資する素材も多くなる」[13]と述べているように、授業①での振り返り内容で触覚の経験値に関する意見が多かったこと符合する。またテラコッタ粘土の「ジャリジャリ」という感触が砂糖のようで「お菓子作りと同じような感覚」といったこれまでに経験した記憶と重ね合わせた学生の意見は、過去の経験を基に今回の触覚から得た感覚・感情が重なり想像やイメージの広がりへと繋がったのだと捉えられる。したがって素材の触れ心地などを実感する豊富な経験が造形表現の源になるといえる。

さらに、これらの体験を通して保育者・教師としての視点や意識が芽生えた。「視覚を遮ることで、子どもが初めてモノに触れた時に感じる感動や不快さ、怖さという気持ちが分かった」といような子ども

の目線に立って考えることができた。「小さい頃から様々なモノに触れて、自分の知っているモノを増やしていく体験が必要なのだと感じた」「触覚でモノを味わうことで、快・不快という感情が生まれてくる。そのためにもたくさんのモノに触れる経験が必要だと分かった」など、これから接していく子どもたちにどのような経験が必要なのかという視点の1つを捉えられた。また「先生が触覚の大切さを分かっているのと、子どもたちにそれを教えていくことができないなと感じた」「子どもの感覚の発達を促せるような工夫した活動に取り組めるようになりたいと、この授業を通して感じた」といった、自分が保育者・教師になった時を想定した思いも出てきた。子どもたちに様々なことに気づかせるために、まず自分がそのものに対して実感し理解することがとても重要なことだと気づけた。そして何より、子どもの発達を考えた工夫ある活動に取り組みたいという志を持てたことは、造形表現だけに留まらず保育・教育に関する学習すべてのモチベーションを上げることに繋がったのではないかと考えられる。

今回の触覚体験から、日常生活や造形表現で重要な役割を果たしている触覚がもたらす力を実感し、そこから自分なりの考えや思いを持てたことは学生たちにとって大変有意義であった。

4.2. 領域「表現」の“様々な素材”について

学生たちの触覚体験からの学びからも分かるように、造形活動は目で見て手などで触るなど五感を通して感じることでそのモノを知り、そこから自分なりに感じ得た感覚から感情が呼び起こされ、過去の経験を重ね合わせながら想像やイメージを広げ、それを表現していく活動である。

磯部錦司は、「人間にとって「表すこと」は「感じる」と連鎖した生得的な営みであり、子どもたちは全身の感覚で外の世界を感じ表現しようとする。「もの」と一体化した直接的なかわりを通して生まれる感じ方の広がりや深まりの中で造形行為を繰り返す自分の存在を確かめることとなり、それがその子の将来に生かされる礎となっていくため、造形教育において「感じる」「表す」という過程をいかに豊かにしていくかが重要である。」[14]と述べている。乳幼児期に素材(モノ)と関わり、触覚を含む諸感覚を通して感じ方を広げ深めていく(実感する)過

程がとても重要であり、その過程があるからこそ素材から感じ取った感覚や感情、イメージを基に自分の思いを表そうとするのである。

また、ヴィゴツキーは「子どもたちの創造活動のためにしっかりした基礎をつくりたいと望むのであれば、子どもの経験を広げる必要がある」[15]としている。そのため「感じる」「表す」過程を豊かにするには限られた素材ではなく、あらゆる外の世界を知り視野を広げられるように“様々な素材”を通した豊かな経験が必要なのである。そして、“様々な素材”に触れ楽しむ経験を重ねた子どもたちは、次第に自ら表したい・作りたいという思いが芽生えてくるだろう。その思いを大切に実現させ、さらに表現の幅を広げるためにも“様々な素材”を用意しておくことが必須となる。

このように、子どもたちにとって価値ある造形表現活動を展開していくには経験が大切だが、そのための素材(材料)選びが要となる。保育者や教師は、子どもの発達段階に応じて安全面や衛生面を加味した上で魅力ある“様々な素材”を一般的な造形素材だけでなく自然物や廃材など生活の中にあるあらゆるものにも目を向けて探し出し、一つでも多く外の世界と子どもたちを繋ぐ橋渡しをすることが大切である。

素材を通して子どもたちにあらゆる感覚で「感じる」、そして手や体全体を使って「表現する」ことの面白さや楽しさなどに気づかせ、そこから感じ得た感情と出会う豊かな経験を重ね感性や創造力を育てるように、またモノで表したい・作りたいという思いの実現に沿えるように、保育者や教師の支援・環境づくりなどの在り方も“様々な素材”には込められていると捉えられる。

5. まとめ

領域「表現」において“様々な素材”は保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領のいずれにも表記されている文言である。これに着目する中で、造形表現において素材に触れる感覚—「触覚」が重要だと捉えた。そこで本研究では保育士・保育教諭・幼稚園教諭・小学校教諭をそれぞれ目指している学生を対象に触覚体験を試みると共に、“様々な素材”が意図しているところ

を考えた。

触覚体験の結果、学生たちは触覚がもたらす力や大切さを実感し、日常生活や造形表現で重要な働きをしていることに気づき、保育者・教師としての視点を学び得られたことがアンケート結果や振り返りから分かった。

素材の触れ心地などを実感する経験が造形表現の源だといえる。したがって、子どもたちの「感じる」「表す」過程を豊かにしていくためには限られた素材ではなく、あらゆる外の世界を知り視野を広げられるよう、一般的な造形素材だけでなく自然物や廃材など生活の中にあるあらゆるものにも目を向けた素材選びが要となる。豊富な素材を通じ、手など体全体のあらゆる感覚を用いて楽しむ経験を重ねることで乳幼児期の子どもたちの感性や創造力を育むことができると考えられるからだ。そのため保育者・教師は“様々な素材”を用いて、一つでも多く外の世界と子どもたちを繋ぐ橋渡しをしていくことが大切なのである。また、子どもの思いの実現に沿えるような保育者・教師の支援や環境作りなどの在り方も“様々な素材”には込められていると捉えられる。

学生数の関係で母数の少ないアンケート結果等となりデータとしての信憑性の低さは否めないが、学生が実感を伴うような体験をしたことやそこから保育者・教師としての視点を培ったことは大変有意義であった。この科目は演習授業ゆえに、ただ単に作品を作り上げることや上手くつくり出すことに目を向けがちな学生も多いが、今回の実践のように実感する経験を通して保育者・教師としての意識や考え、子どもたちへの支援・共感力を高めていける授業にすることを自身の今後の課題の一つとしたい。

謝辞

本研究・論文作成を行うに当たり、各方面の先生方に格別なご助言・ご配慮をいただいたことに心より感謝いたします。

引用文献

- [1] 厚生労働省：保育所保育指針解説，フレーベル館，p.170 (2018)
- [2] 内閣府・文部科学省・厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説，フレーベル

- 館, p.215 (2018)
- [3] 厚生労働省：前掲書, p.280
- [4] 内閣府・文部科学省・厚生労働省：前掲書, P.300
- [5] 文部科学省：幼稚園教育要領解説, フレーベル館, p.246 (2018)
- [6] 岩崎由紀夫著：花篤實監修「幼児造形教育の基礎知識」, 建帛社, p.35 (2013)
- [7] 椎橋げんき著：シリーズ乳幼児はすごい！⑥
ものが変わる, 『教育美術10月号』, 教育美術振興会, 第77巻 第10号(第892号), p.15 (2016)
- [8] 槇英子著：「保育をひらく造形表現」, 萌文書林, p.16 (2008)
- [9] 小笠原文著：「“触覚”から考える造形表現」, 広島文化学園大学学芸学部紀要, p.27 (2014)
- [10] 槇英子著：前掲書, p.39
- [11] 中丸雄二郎著：「共通感覚論」, 岩波書店, p.114 (2000)
- [12] 同上, p.112
- [13] エリ・エス・ヴィゴツキー著 広瀬信雄訳：「子どもの想像力と創造」, 新読書社, p.21 (2002)
- [14] 磯部錦司編著：「造形表現・図画工作〔第2版〕」, 建帛社, p.3 (2018)
- [15] エリ・エス・ヴィゴツキー著 広瀬信雄訳：前掲書, p.22

論文集「人と環境」Vol. 13 (2020)
大阪信愛生命環境総合研究所編
